

追悼 佐藤明達氏

日本天文学会会長 井田茂 (東京工業大学・地球生命研究所)

日本天文学会早川幸男基金に対し、基金設立直後からその趣旨に賛同され [1,2], 長年にわたり総額1億円を優に超えるご寄付をいただいていた佐藤明達(さとうあきさと)氏が、去る2023年10月9日に逝去された。

故佐藤氏からのご寄付に関しては、その都度、天文月報の「月報だより」等で周知していたが、ご自身が積極的な広報を希望されなかったこともあり、多くの会員に十分認識されていたとは言えない。そこで、故佐藤氏の生前のご貢献とその背景にあったご意思を広く共有する機会を設けるため、本追悼特集を企画した。故佐藤氏と直接やりとりがあった歴代会長・理事長からは、当時のエ

ピソードを含めた追悼文をご寄稿いただいた。また佐藤氏の一連のご貢献は、大阪市立電気館時代の活動がその土台となっており、その当時のお話を含めた追悼文を当時のご同僚であった加藤賢一氏からいただいた。

この追悼特集が、故佐藤氏のご貢献を偲び、各会員が改めて感謝の念を抱く機会となれば幸いである。

参考文献

- [1] 佐藤明達, 1994, 天文月報, 87, 134
- [2] 佐藤明達, 1996, 天文月報, 89, 418

佐藤明達氏を思う

第46代日本天文学会理事長 岡村定矩 (東京大学名誉教授)

佐藤明達氏は天文学、特にその教育普及に関する幅広い見識とご意見をお持ちで、折に触れて何度も手紙をいただいた。私は2011年1月に理事長になり、法人法の改正により日本天文学会が新法人として再出発するための待ったなしの作業に当たることになった。定款も新たに作り直し組織運営の抜本的な見直しをする必要があった。そのころ佐藤氏より、「定款の「目的」を述べた文章表現が不適切であるので、自分の意見(天文月報2004年11月号670頁)を見るように」とのお手紙をいただいた。もっともなご意見であり、新法人の定款策定で参考にした。

私は中村士氏とともに理科年表2012年版で「天文学上の主な発明発見と業績」を大改訂した。すぐに佐藤氏から、「...2頁から5頁に拡大しているので嬉しくなりました。事項欄も詳しくなりました。」とお褒めの言葉をいただいたが、それに続いて「私の感想」として21項目にわたって質問と検討課題が記載されていた。翌年版に必要な改訂をしたことはいうまでもない。また、学会100周年記念出版事業の別巻「天文学辞典」を贈呈したところ、これについても膨大なコメントと誤りチェックリストが学会に寄せられた。東大定年後私が法政大学に職を得て

からは、「学生さんに読んでもらってください」との主旨で、佐藤明達選集「I 天文教育」および「II 天文史」を御寄贈いただいた。

私が理事長時代にも、佐藤氏から早川基金と天文学会にそれぞれ莫大なご寄付をいただいた。ちょうど学会が新法人として再出発する時期に若手支援に莫大なご寄付をいただいたので、この機に若手支援プログラムを抜本的に拡充することはできないかと実務理事会で議論を始めた。その方向性が見えてきたら学会として佐藤氏をお尋ねして、お礼と共にご寄付の使用目的についてご相談する予定だった。新法人の設立に関して、当初は

内閣府の「公益認定」が厳しく、一般社団法人で申請せざるを得ないかとも思われた。しかし私は「公益社団法人」とすることは必須と考えていた。佐藤氏のことが頭から離れなかったからである。そのうちに定款および諸規則の改定や内閣府との交渉など新法人移行作業が手一杯となり、公益認定は何とか実現できたが、結局若手支援プログラムの検討には手がつかず、ついに佐藤氏に直接お会いして理事長としてお礼をお伝えすることが叫わなかった。これはいまだに心残りである。

佐藤明達氏のご冥福をお祈りいたします。

佐藤明達さんへの感謝を込めて

第47代日本天文学会会長 櫻井隆 (自然科学研究機構国立天文台名誉教授)

私が初めて佐藤明達さんの名前を知ったのは、1993年頃、故・石田蕙一氏を代表者として進んでいた「文部省学術用語集・天文学編」の増訂作業（初版は1974年）の中でした。「佐藤明達氏のご意見について」という議題が何回か編集会議に上がり、一家言をお持ちの方であるということはその時から認識していました。その後、2013年に私は日本天文学会会長になり、早川基金に長年にわたり多額のご寄付をいただいていることを知りました。学会の会計監事からは、寄付の額が大きいので、用途についてご本人の意向を書面よりいただいておりますのがよいとの指導がありましたので、2013年5月にお礼も兼ねて会計理事の松尾宏氏と東京葛飾区のご自宅を訪問しました。

お会いする前は、何となく怖い方なのではないかと心配していましたが、お会いしてみると、半分は当たっていた、という感じです。いろいろな文献、新聞の切り抜き、自作の星座早見など天文教材を用意して待ち構えておられ、2時間ほどお話を伺いました。学会の定款の文章がおかしい、

学会の出版物に間違いがある、今の天文月報の表紙はなんだかわからん、等々が「怖い」部分で、「持ち帰って検討します」とお答えしました。それまでいろいろどころに書いた記事をまとめた、準備中の「佐藤明達選集」全5巻の目次（手書き）を下さり（2014～2018年にかけて誠文堂新光社より出版されました）、一般向けとはいえ、ただきれいな絵や楽しい解説だけではだめで、徹底的に調べて正しい著述をしなければならない、と強調されていました。

ご寄付の用途については、功成り名遂げた人を表彰するのではなく、これから活躍するであろう若者を支援して、その結果がよい研究に結びつくのが希望なので、早川基金の主旨がそれに合っていてよいのだ、ということでした。天文月報に掲載される、早川基金による海外渡航報告はすべて読んでおられ、寄付が役に立っていることがうれしい、とおっしゃっていました。学会としては、例えば寄付金を研究奨励賞にも回せないかという下心もあったのですが、このお話を聞いてそれはな

し、という判断をしました。

その後、2014年にも寄付をいただき、そのお礼に再度ご自宅を訪問しましたが、それがお会いした最後になってしまいました。「お墓はただのカルシウムの置き場だから」などとドライなこと

をおっしゃっていましたが、天の星になって、ともすると中途半端に物事を済まそうとする我々を見張っておられるような気がします。ご冥福をお祈りします。

佐藤明達さんを偲ぶ

第49代日本天文学会会長 柴田一成 (同志社大学・理工学部)

2018年11月24日、東京都葛飾区の佐藤さんのご自宅を副会長の林左絵子さんと一緒に訪問しました。天文学会として、学会への多額の寄付への感謝をお伝えするためです。話はずみ、2時間くらい滞在したかと思います。便利な星座早見盤の制作法(佐藤明達選集第1巻 pp.78-79)についてご教示いただいたところまでは、なごやかに話ができていたのですが、天文学会の様々な取り組みについて批判的な意見を色々述べられたのはちょっと困りました。学会の代表(会長)としての立場から、すぐに同意しかねるような意見や提案に対しては色々反論もしました。せざるを得なかった、というのが本音です。私とは京大宇宙物理学教室の先輩後輩という間柄で多少気安く話ができる関係にあったのも一因かもしれません。(とはいえ私より26歳年上の大先輩ではあるのですが)。

というわけで、感謝の意をお伝えしに行ったのに、2時間近く活発な議論をしてきた、という異例の訪問となりました。2時間経過後、「今日は時間になりましたので、ここで帰らせていただきます」と述べたら、「まだ言いたいことの半分くらいしか言ってない…」と大変残念そうな顔をされたのが、忘れられません(話の途中で反論するのが私の悪い癖です)。申し訳ないと思いつつ、「また来させていただきます」と言って退席しました。

しかし結局、定年直前の私自身の多忙な状況があり、定年後はコロナが始まったこともあって、ついに佐藤さんのご自宅を再訪することができなかったのは、全く申し訳ない限りでした。そう言えば、上記訪問の直後、言いたいことの残りを伝えるためでしょうか、手紙を送ってくださっていました。その一部を以下に紹介します。

「(2018年)天文月報10月号に載った小生の[星空市場]は、天文学会ではどう対応して下さっているでしょうか。(中略)「時間」が「時刻 time instant, a moment」か「時間 time duration」かどちらを指すかは重大な問題です。私はこの区別をあいまいにして理科教育の振興を叫んでも無意味だと思うのです。めったに使うことがない語を死語といいます。「中央標準時」はまさにそれです。その現状を放置しているのは天文学会の怠慢ではないでしょうか。サマータイムも「夏時間」ではなく「夏時刻」とあります。理科年表の「世界各地の標準時」の項にも「夏時刻」とあります。時の長さの変更でなく、時刻の変更ですから。」

確かに私もこれまでの人生で「中央標準時」という言葉は使ったことがありません。上記[星空市場]では、佐藤さんは『日本時間』は「日本時」と言うべきだ』と提案されていました。もっともな提案だと思います。上記のお手紙にすぐに対応できなかったのは、まことに申し訳ないことでした。佐藤さんの遺言とも言える上記提案を本

稿に記すことで、天文学会に様々な面からご支援ご協力いただいた佐藤さんにあらためて感謝の意を表したいと思います。ご冥福をお祈りします。

(注)本文中で引用した「佐藤明達選集 I 天文教育, 2014.9」(誠文堂新光社発行)は確認したところ私費出版のため非売品とのことでした。天文教育や天文学史に関する情報が満載で大変参考になる全6巻の選集が購入できないのは残念ですが、主だった天文関係の教育研究機関の図書室には寄贈されているかと思えます。



2018年11月24日、佐藤明達さんのご自宅にて、
林左絵子さん撮影。

佐藤明達氏の思い出

第50代日本天文学会会長 梅村雅之 (筑波大学・学長特別補佐)

佐藤明達氏は、東京都葛飾区堀切にお住まいでしたが、私の出生地が葛飾区亀有であったこともあり、近いご縁を感じて、天文学会長の任期中に直接ご訪問して、早川幸男基金へのご寄付と天文学会への提言へのお礼を伝えたいと思っていましたが、コロナ禍にあって叶いませんでした。2019年7月号の天文月報に、会長の挨拶文を書かせて頂いたときに、佐藤氏からお手紙を頂きました。お手紙には、天文月報への様々な改善提案と、天文教育への熱い思いが綴られていました。私は、国立天文台の助手をしていた際、天文月報

の編集長を仰せつかり、1992年に紙面の大幅改訂を行った経緯などを説明し、引き続きご指導をお願いしたい旨を文書でお返事しました。その後も、お手紙を頂き、自分は天文学者になりそこねたので、若手研究者に希望を託しており、早川基金が若手研究者の支援に使われていることに満足していますと書かれていました。生前、常に天文学会の活動と教育を気にかけて頂いたこと、そして多額のご寄付により若手研究者の育成に多大なご貢献を頂いたことに深く感謝申し上げます。佐藤明達氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

佐藤明達さんからの手紙

第51代日本天文学会会長 山本智 (総合研究大学院大学)

お恥ずかしいことですが、私は2021年6月に天文学会の会長になってから、佐藤明達さんのこと、そして、早川幸男基金に毎年多額のご寄付をしてくださっていることを知りました。COVID19

感染症のため、2年間ご挨拶に伺うことは叶わなかったのですが、たびたびお手紙をいただきました。内容は、「時間と時刻」のこと、天文月報の記事のこと、星空市場へ投稿した意見のことなど

多岐にわたり、かなりきついお叱りも少なくなかったのですが、その中に温かい励ましの気持ちが込められていたように感じています。なかでも印象に残っているのが、早川幸男基金の支給対象を年齢から博士修了後の年数に変更する際に、ご意見を伺ったときのお返事です。賛同していただき、「私の役目はポパイにホウレン草の缶詰を渡すことです。よろしく。」とありました。若手研究者が大きく羽ばたいてくれることが、佐藤明達さんの心からの願いだったのでしょう。ご冥福を心よりお祈りします。

日本天文学会会長 山本 豊様
佐藤明達 様
前略 お手紙有難うございます。
社会の進化に依りた改訂に賛同します。
早川基金の研究者の経営の incentive を与えるもの
と思っております。早く返答は、ホパイにホウレン草
の缶詰を渡すことです。よろしく。
なお最近、天文月報には早川基金の経歴を
報告が途絶えていますが、こゝでコロナ禍による
ことが理由。同学会はオンラインにて行われて
いるのではないかと、
敬具
July 11, 2022

佐藤明達氏からいただいたお返事の手紙。

大阪市立電気科学館の佐藤明達（1928-2023）さん

加藤賢一（星学館）

長らく大阪市立電気科学館を基点として独自の天文学研究と普及教育に邁進されてきた瘦身白眉の佐藤明達（さとうあきさと）さんが去る2023年10月9日に逝去された。間もなく満95歳の誕生日を迎えようとする直前の悲報であった。決して恵まれた体躯ではなかったが、柳に風、うまいこと病気を回避し、好きなことに打ち込むことができた一生ではなかったかと思う。ご冥福を祈るばかりである。

佐藤さんは1956年4月から1987年11月まで電気科学館に天文職員として勤めていた。最も充実した期間をここで過ごしたと言える。筆者は後半の1974年から1987年までの13年余にわたり、文字通り机を並べて同僚後輩として接していただいた。戦時中に供出した冷房装置が復活したのが1985年頃だったから、佐藤さんの在籍期間は戦後の復興期にまるまる重なっていて、時間はあるがお金がない、という時代だった。その「あるのは時間だけ」を利用して佐藤さんは調査研究に勤

しんだ。アメリカの天文雑誌Sky & Telescopeはお気に入りの一つで、届くたびに舐めるように隅々まで目を通していった。佐藤さんの文献獵歩の遍歴と興味関心の鋒先は佐藤明達選集にあるとおりで、星座から始まり太陽系、恒星界、天文学史、人物誌、天文教育と広範に広がっていて、分野を絞ることは難しい。いわば α から ω までの天文知識人で、この範囲でわからないことがあったらとりあえず佐藤さんに聞いてみるというのが常であった。ただ、「おいしいところを齧ってみて味がわかればそれでよし」という姿勢だったのか、体系だってまとめるところまで進まなかった。彗星研究の長谷川一郎さん（1928-2016）が訪ねて来ては「佐藤さん、あなたはちゃんと勉強した人なんだから！」と再三言っていたが、もっと分野を絞って集中すべし、ということだった。独学で天体力学をマスターし、彗星研究に応用していた苦勞人の長谷川さんでなければ言えない言葉だった。

佐藤さんは1971年に惑星面研究で有名だった佐伯恒夫さん（1916-1996）に代って天文部の主任となったが、その佐伯さんは「なかなか頑ななところがあってねえ」と語っていた。佐藤さんには納得のいかないことには首を振らないところがあり、その調整に佐伯さんが奔走することがあったらしい。生真面目な佐藤さんらしいエピソードであった。

1970年頃にあった天文学会改革運動の中では学会として天文教育に力を入れるべきだという立場から積極的な発言を行っていた。また、後進の育成にも心を砕いていて、天文学会に相当の寄付をされたのはそうした気持ちの表れだったと思う。

佐藤さんは東京のお生まれで、幼少期は体が弱く、病床での退屈のぎにと父君が科学の本や雑誌を買ってくれて、それがきっかけで天文学を志したと話しておられた。その頃、一家は印刷会社だったかを営んでいたとのことで、不自由なく育ったのだらうと思う。社主だった父君が亡くなると会社をたたみ、跡地に借家を建てた。その家作がご母堂を支え、その後は佐藤さん自身を支え、そして一部が天文学会等への寄付につながったようだ。

地元の旧制中学校を終えると旧制の水戸高校に進み、続いて京都大学宇宙物理学科で学ばれた。そして、大学院へ進学し、修士課程では変光星の分類研究を行い、引き続き研究活動に励んでいたところで電気科学館へ就職となった。宮本正太郎先生（1912-1992）とタクシーに同乗していた時に「こんな話があるんだが」と電気科学館の募集を聞かされ、即答したとのことである。

大阪市立電気科学館は1937年3月に開館した国内最初の科学館で、プラネタリウムを最初に導入した施設だった。何せわが国最初のプラネタリウムだから経験者がいない。夜空を解説できる人がそうそういるわけもなく、以前からプラネタリウムを広く紹介していた京都大学の山本一清（1889-1959）に相談を持ちかけ、当時副手だった高木公三郎さん（1907-1991、後に京都大学教授）を派遣してもらった。高木さんは、1936年、ベルリ

ン・オリンピックに参加する傍らツァイスのイエナ工場でプラネタリウムの組み立て作業に従事し、欧米各地の施設を調査して帰国するとわが国最初のプラネタリウム解説員となった。高木さんの後任となったのが花山天文台で保時作業に従事していた高城武夫さん（1909-1982、後に和歌山天文館）で、1937年8月から1952年まで在籍した。やや間があって1956年4月に佐藤さんが採用された。

電気科学館の天文職員の仕事はプラネタリウムでの日々の投影に加え、普及教室での講義、友の会での指導や執筆、そして展示品の制作や維持管理であった。天文職員の間では調査研究が大事で、それに基づいて普及教育活動を行うのだという気風が強かったが、その雰囲気を先導していたのがリーダーの佐藤さんだった。筆者が1974年に採用された時の陣容は佐藤さんの下に菊岡秀多（きくおかひでかず、1941-2008、後に東亜天文学会理事長）、黒田武彦（1946-、後に西はりま天文台、兵庫県立大学）、加藤賢一（1951-、後に岡山理科大学）の4名だった。中でも黒田さんは普及教育の質量面でのレベルアップと調査研究のさらなる充実を強く訴え、佐藤さんを後押しする場面がしばしば見られた。この4名体制は佐藤さんの在職時後半を通して続き、佐藤さんには最も生産的な時期ではなかったかと思う。

佐藤さんが勤め始めた頃はプラネタリウム施設は数えるほどしかなかったが、わが国の経済成長と同期して増え、退職期には250館ほどに達していた。佐藤さんはそうした成長期を知る誠に貴重な存在だった。もっと聞きたいことがあったのに残念としか言いようがない。合掌！

佐藤明達氏主著

- 佐藤明達著Ⅰ 天文教育, 2014.9
 - 佐藤明達著Ⅱ 天文史, 2015.5
 - 佐藤明達著Ⅲ 天文周遊, 2016.3
 - 佐藤明達著Ⅳ 天文周遊, 2016.12
 - 佐藤明達著Ⅴ 天文逍遥, 2017.10
 - 佐藤明達著Ⅵ 天文書評, 2018.5
- いずれも発行元は誠文堂新光社